言葉の力を育てるために
－小学部低学年における実践－

谷口　洋子

小学部においては、日常生活のあらゆる機会をとらえ、どの教科においても基礎となるような言葉を増していくこと、そして、言葉の力を豊かに育てていけるような環境作りと合わせて、その環境に児童を慣れさせていくことが大変重要である。日頃の実践を通して、低学年において言葉の力を育てるために大事にすべきことを以下のように考えた。　(1) 言葉を使って考えさせる。　(2) 話を伝えたいという意識を育てる。　(3) ３つの「きく」態度を育てる。　(4) 文章を書かせる。　(5) 雑学を増やす。　(6) 本の読み聞かせをする。

【キーワード】　言葉の力　教科外の時間　言葉の指導

１　はじめに

小学部に入ると、教科学習が始まる。それぞれの教科の学力を身につけ、伸ばしていくために、日頃から日本語の力を豊かに育てていけるような環境作りを考えながら指導を行ってきた。

ここでは、低学年において、学力につながる正しい日本語を理解し、豊かに表現できる力を高めるため、小学１年から２年間行ってきた教科外の時間の言葉の指導について報告する。

２　児童の実態と課題

本校小学部への入学者のほとんどは、本校幼稚部からの進学者である。聴覚口話法と、場面によっては、発音や理解を補助する音韻サインを活用しながら、生活言語を身につけて入学してくる。

６人の児童を受け持つことになり、入学当初感じたことは、聴覚をよく活用し、話し好きで積極的に自分の気持ちや考えを話そうとする児童が多いということ、しかし反面、相手の話を聞く態度が不十分だったり、発想や思考の柔軟性に欠け、話のやりとりの場面でスムーズにいかなかったりするということ、言語力の個人差が大きく、教科学習を進めにくいということであった。

そこで､生活言語を豊かにすることを基本にして、柔軟な思考力をつけることや聴取態度を身につけることを課題とした。そのためにも、教科外の時間を活用することが有効であると思われた。

３　指導の実際

（１）言葉の指導場面

学校生活の中で、以下の４つの場面を、言葉の指導場面ととらえた。

① 登校から下校までの生活場面や学習場面
② 行事や学部集会、休み時間など、学部や学年の合同の活動
③ 発音指導の後や放課後など、担任の個別指導の時間
④ 毎日の日記や作文指導の機会

（２）実践内容

① 言葉を使って考えさせる。

児童の身の周りで起こったことや感じたこと、体験したことを言葉や文で表現させた｡｢いつ｣｢だれが｣｢どこで｣｢どんなふうに｣｢どんな気持ち｣｢どうして｣など､場面に応じて児童に質問したり、板書やプリントで穴あき文を作ったりしながら、話の内容が理解できているか、正しく表現できているかどうかを確かめた｡話す時は単語ではなく、構文での受け答えを待ち、口声模倣させて、正しく言えるまで繰り返させた。

また、話に出てきた表現の中から、押さえておきたい言葉や言い回しを選び、毎日、文作りの宿題に出したり、カードに書き表し、教室内に掲示したりして、いつでも必要に応じて使えるようにした。

＜児童と教師との話のやりとりの例＞

昼休み、遊びから戻ってきたある児童とのやりとり（１年）

Ｃ（児童）「Ｂさんたちと遊んだ。」

Ｔ（教師）「何をしたの。」

Ｃ「こおり鬼をした。」

Ｔ「どこで遊んだの。」

Ｃ「校庭で遊んだよ。」

Ｔ「だれが鬼だったの。」

Ｃ「ＡさんとＢさんだよ。」

Ｔ「Ｃはつかまったの。」

Ｃ「私はつかまない、Ｄがつかまったよ。」

Ｔ「私はつかまら・・，つかまらな・・」

Ｃ「私はつかまらなかった。」

図１　穴あき文の例－その１－（２年）

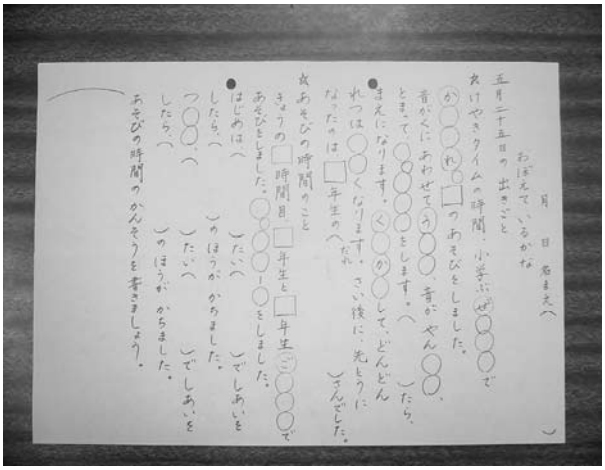

図２　穴あき文の例－その２－（２年）

＜文作りの例　－その１－＞

やり方:与えられた言葉を使って、文を考えて話す。（１年）

Ｔ　:「今日は」の後に続けて、文を考えましょう。

Ｃ１：今日は、晴れています。

Ｃ２：今日は、せきがえがあります。

Ｃ３：今日は、朝お母さんにおこられました。

＜文作りの例　－その２－＞

やり方：与えられた言葉や文を使って、文や文章を完成させて書く。（２年）

もじもじ

Ｃ１：あたらしいともだちができたから、もじもじしていました。

Ｃ２：もじもじしないでどうどうとしましょう。

どうどうと

Ｃ１：はずかしいけれど、がまんしてどうどうとすすみました。

Ｃ２：どうどうとえらそうにしゃべる。

＜文作りの例　－その３－＞

やり方：（　　）に入る文を考えて書く。（２年）

例３－１

Ｃ１：いもうとといっしょにテレビを見ていました。
すると、（テレビのがめんがわれました）。
ぼくもいもうとも、びっくりしてしまいました。

Ｃ２：いもうとといっしょに、テレビを見ていました。
すると、（きゅうにテレビから手が出てきました）。
ぼくもいもうとも、びっくりしてしまいました。

例３－２

Ｃ１：夕方、がっこうからかえってくるときです。
とつぜん、（大雨がふりました（原文））。
（（直して）ふってきました）
ぼくは、いそいでいえまではしってかえりました。

Ｃ２：夕方、がっこうからかえってくるときです。

とつぜん、(バカとのが見たくなりました)。
ぼくは、いそいでいえまではしってかえりました。

更に、五感を使った言い表し方にも慣れるよう、物や言葉を取り上げて話題にすることもあった。

果物や花、マジックボックスの中に物を入れて、見たり、触ったり、匂いを嗅がせたりしながら、感じたことを色々な言葉で表現させるようにした。

＜五感を使って感じた言い表し方の例＞
朝の会で（１年）
Ｔ　:「昨日も今日も晴れているけれども、に続けると？」
Ｃ１:「地面がぬれている。」
Ｃ２:「地面が湿っている。」
Ｃ３:「風が冷たい。」
Ｃ４:「寒い。」
Ｃ５:「風が強く吹いてる。」
Ｃ６:「空気が冷たい。」

朝や帰りの会で、時間を見つけてよく行ったのが言葉遊びである。言葉遊びのねらいは、語彙を増やす・構文力をつける・発想や思考の柔軟性を養う・友達と協力しながらやりとりを楽しむ・相手の話を聞き、待つ態度を身につける・各児童の言葉の習得状況が把握できる、など、色々な効用が考えられるので、わずかな時間を見つけて継続して行うようにした。

＜主に行った言葉遊び＞
「しりとり」「語頭・語中・語尾に○のつく言葉」「いろいろな形・色・季節を表す言葉集め」「階段言葉」「ビンゴゲーム」「連想ゲーム」「３つのヒント」「なぞなぞ」「クロスワードパズル」「早口言葉」「文作りリレー」「早口言葉」「同じところのある言葉さがし」「数字の語呂合わせ」など

＜言葉遊びの例＞
ａ　しりとり（１年）
めがね→ねこ→こな→なし→しか→ かくれんぼ→ぼうし→しんだいれっしゃ→やま→まくら→らくだ→だんご→・・・

ｂ　語頭・語中・語尾に○のつく言葉
やり方:「ん」でおわる言葉 を考えて順番に答える。（１年）
にんじん・やかん・しんかんせん・だいこん・こくばん・りぼん・みかん・ごはん・れもん・れんこん・たいけん・きんかん・・・・

ｃ　階段言葉
やり方：語頭は同じで、字数が１つずつ増えていく言葉を考える。（１年）
例１

あ					
あ	し				
あ	た	ま			
あ	さ	が	お		
あ	り	じ	ご	く	
あ	ん	ぱ	ん	ま	ん

例２

か				
か	め			
か	つ	ら		
か	ま	き	り	
か	ぶ	と	む	し

ｄ　連想ゲーム
やり方：出された言葉に関連する言葉を挙げて、つないでいく。その際、「○と言ったら□」という言い回しを覚え、リズムに乗りながら、次の人に伝える。（１年）
バナナ→黄色→レモン→すっぱい→うめぼし→赤い→りんご→あまい→さとう→白い→シロクマ→南きょく→こおり→つめたい→れいぞうこ→大きい→車→うごく→ロボット→でんき→べんり→エレベーター→のる→ジェットコースター→こわい→おばけ→・・・

ｅ　３つのとびら

やり方：答えに結びつく３つのヒントを考えて、問題を作る。（１年）

例１

Ｃ１：毛がはえています。
　　虫のなかまです。
　　しずかにうごきます。
　　これは、何でしょう。

Ｃ２：　毛虫です。

Ｔ　：「毛虫だと思います。」と言うんだよ。

Ｃ２：毛虫だと思います。

Ｃ１：答えは毛虫です。当たりです。

例２

Ｃ３：ケーキにのっています。
　　赤くてあまいくだものです。
　　ごまみたいなつぶがたくさんあります。
　　これは、何でしょう。

Ｃ４：いちごだと思います。

Ｃ３：答えはいちごです。当たりです。

ｆ　文作りリレー

やり方：個別指導の中で、○で始まる言葉を考えながら、２人交代で文を作る。（１年）

あ　いすを食べました。
い　ちごのあいすを食べました。
う　っかりあいすをおとしてしまいました。
え　ーんえーんとなきました。
お　かあさんがおこりました。

ｇ　早口言葉

やり方：かるたの読み札や早口言葉の文を、発音に気をつけてリズミカルに速く言う。（１、２年）

「だるまさん　だるまさん　にらめっこ　しよう」
「ねこが　ねむれば　ねずみが　ちょろり」
「なまむぎ　なまごめ　なまたまご」
「あかえんぴつ　あおえんぴつ　きえんぴつ」
「かえる　ぴょこぴょこ　みぴょこぴょこ
　あわせて　ぴょこぴょこ　むぴょこぴょこ」
「ぼうずが　びょうぶに　じょうずに　ぼうずの
　えを　かいた」　　など

ｈ　同じところのある言葉さがし

やり方:同じところのある言葉を探して、文を作る。（２年）

例１

Ｃ１：とかげは　ひかげの　おかげで げんきです。

例２

Ｃ２：にわとりが　やきとりを　つくりながら
　　しりとりを　したよ。

ｉ　数字の語呂合わせ

やり方：数字の組み合わせを考えて、言葉を作る。（１、２年）

９４（くし)、１０１（とおい)、
０８７４（おはなし)、8`７７（ばなな)、
１１７　１１７（いいな　いいな)、
４１５　０６２（よいこ　おむつ)、
４６５２`（よろこぶ）　など

② 話を伝えたいという意識を育てる。

相手にしっかり話を伝えられるように、口の開け方や声の大きさ、話の速さ、発音に気をつけて話しているかどうか声がけをした。鏡で児童の話し方を見せたり、教師が児童の話し方をまねたりしながら、話し方を意識させた。

また、相手に話しても伝わらなければ、音韻サインを用いるよう声がけしたり、文字や表情や身振りを使うなど、自分で伝え方を工夫して話せるよう考えさせた。

③　３つの「きく」－聞く・聴く・訊く－態度　をつける。

補聴器や人工内耳を使って、いろいろな言葉の有無を「聞く」､相手をよく見て､話をしっかり「聴く」､わからないことは、自分から相手に尋ねたり、質問したりする「訊く」態度を育てることも大切である。

低学年の時期には、特に、「聴く」態度をつけることが大事であると思われるので、口の開け方や速さ、声の大きさなど、話しかけを工夫したり、話の

長さを短くしたりしながら、わかりやすく話すよう心がけた。

また、わざと間違えた言い方をして間違いに気付かせたり、文末まで聴かないと判断できないような言い方をしたりして、遊びを交えながら聴かせることもあった。

④　文章を書かせる。

「早く、正しく、丁寧に」書き写しができることを目指して、板書事項や教科書に出てくる詩やお気に入りの文章などを書き終えたら、声に出して読ませ、間違いがないかどうか確かめさせた。言葉や文をまとまりとしてとらえられるようになると、書き写しもスムーズになってくる。また、話の内容を理解する力も育つ。

保護者の協力を得ながら、できるだけ毎日日記を書かせ、言葉や言い回し、話の展開などをチェックし、必要に応じて書き直しをさせた。日記の中の話題や表現で、他の児童の参考になるようなものがあれば、朝の会で共通の話題として取り上げて話し合ったり、学級通信で紹介したりしながら、日記を書きたいという意欲を高めていけるよう心がけた。

⑤　雑学（いろいろな知識）を増やす

常識や様々な知識などを身につけさせることをめざして、身の周りのことやいろいろな話題を取り扱う時間をできるだけ多く持つようにした。朝の会では当番の児童に、日記の話や身近な出来事、テレビや新聞などの話題や記事などを友達に紹介させた。その話題をもとに、児童の興味や関心に応じて、話の内容を広めたり深めたりするようにした。

また、昼食時や休み時間などに行う児童との何気ない雑談の時間も無駄にはできない有意義な時間であった。

＜朝の会の話の例＞

当番の児童が天気に大雨、大風、台風と書いた。（１年）

話題としたこと

Ｔ：季節はずれの台風、台風の多い時期は秋、
　　ちょうど梅雨に入った日（＝梅雨入りした）
　　梅雨の季節、期間
　　梅雨は南（沖縄）から北へ（日本地図使用）

Ｃ：「えーっ！」「日本って広い！」

Ｔ：雨や風の被害、経験、梅雨の印象

Ｃ：「家が流される」「車が水に浸かる」「どぶがあふれた」「じめじめする」など・・・

Ｔ：雨の必要性

Ｃ：「水が足りなくなる」「植物が育たない」「生き物は元気がなくなる」

⑥　本の読み聞かせをする。

読書の効用は計り知れない。季節や行事、生活指導などに関連させて、本の読み聞かせを随時行った。特に時間を取りやすかったのは、帰りの会である。児童は、本で得たお気に入りの言い回しがあると、生活の中で喜んで使おうとした。１年生の初めの頃は、紙芝居もよく扱った。 読み終えた本を教室の一角に置いておくと、しばらくの間、手に取って読んでいた児童も多い。学習している内容に関連する本があれば、必要に応じて紹介した。

＜児童のお気に入りの本＞

『とべバッタ』　田島征三　偕成社
『はなをくんくん』　ルース・クラウス　文　福音館
『ねずみ14ひきシリーズ』いわむらかずお　童心社
『ないた　あかおに』浜田廣介　文　偕成社
『わにがわになる』　多田ヒロシ　こぐま社
『めだかのめがね』　多田ヒロシ　こぐま社
『かえるがみえる』　まつおかきょうこ　こぐま社
『さる・るるる』　五味太郎　絵本館
『なんだ　なんだ』　古川タク　童心社（紙芝居）

４　成果と今後の課題

学校生活の中で、教科外の時間を活用して、言葉の指導を２年間継続して行ってきた結果、以下のような児童の変容が見られた。

・言葉への関心が高くなり、生活言語が豊かになってきた。

・色々な言い回しも覚え、正しい構文で話すようになってきた。

・生活の中でも言葉遊びを楽しみ、言葉でのやりとりが増えた。朝や帰りの会で、少しでも余裕があると、児童から「言葉遊びをしよう。」と催促の声が聞こえ、回数を重ねる毎に、答え方に工夫が見られるようになってきた。
・発想や思考に柔軟性が見られ、話の展開がスムーズになってきた。話も広がり、想像しない方向に話が展開していくこともあるが、児童がお互いに楽しんで話し合っている姿を見ることができるようになった。
・言葉や知識が増え、学習場面で友達同士で助け合うようになってきた。教科の中でわからない言葉が出てくると、誰かが説明したり、経験したことや自分の知識を紹介したり、と授業に臨む姿勢も変わってきている。

２年間取り組みを行ってきて、教科外の時間における言葉の指導に当たっては、
・楽しめる時間であること
・無理のない時間設定であること
・児童の能力に見合った課題になっていること
が大切である、と思われた。

今後の課題としては、児童が相手に伝えたいことを適切に表現できるよう、話し言葉及び書き言葉の指導や支援の在り方について、更に工夫を重ねていきたいと考えている。